

たまいたま さ川柳



巻頭言

精神の車輪とくわん

願法みつる

この表題は、国際ジャーナリスト廣淵升彦氏が、あるエッセイで述べられた言葉である。

素朴で高度な文明を保っていたインカ帝国は、聖なる太陽に似た丸い形を生活の道具としては一切用いていなかった。武器と言えば棍棒だけ。そこへ車輪と大砲のピサロ軍隊が上陸したのだ。未知との遭遇で帝国は滅亡した。コンドルの悲劇は、神官の予言であったとか。

車輪も滑車も回転軸も用いない文明が、異質の発想を持たなかった悲劇を、国家の「精神の車輪」が欠如した事例であると廣淵氏は示しておられる。

「自国にはないが他の文明圏には等しくあるもの」「自国では通用するが他国では通用しない価値観」・・・への柔軟な思考が必要であると述べている。

例えば、善悪二元論の一神教的世界観などは、まさにインカ的な精神姿勢ではないのだろうか。IT化が超速回転の時代には、思考はもつと発揚されるべきだろう。

IT人口希薄な高齢化構造の川柳界でも、いまやインカ的衰亡の兆しがあると言ったら語弊があるだろうか。川柳界の精神の車輪構造や機能性が低下しているのではないかと、危惧している。車輪のスポークが不足して、走行が蛇行し始めている吟社も見受けられる。

日日是好

願法みつる

一とゼロその間にある正と反

宇宙とは所詮は壺の中らしい

韓非子の国がニンゲン打ち上げる

先達の鬼も仏もいて浮世

点滴へそつと混ぜてる花の蜜

福の神なんでそんなに怖い顔

胃力メラが素知らぬ振りで通過する

背の丸み老いの目線が低くなり

瘦せた身とサンマの骨の相似形